

発達検査と対人援助学

⑩ 検査と対人援助

大谷多加志

執筆者短信にも書いたのですが、2022年12月23日に対人援助学会の研究会でお話をさせて頂くことになりました。マガジンで連載していることを中心に、今思っていることをお話ししようと思っていたので、研究会のテーマは連載タイトルと同じで、と考えていました。先日の対人援助学会の第14回大会で、研修・交流委員会の千葉さんが次回の研究会について告知してくださったのですが、そのテーマが「検査と対人援助学」。あれ？微妙に連載タイトルと違うぞ…、連載タイトルは「発達検査と対人援助学」…。“タイトル違ってますよ”と言わないと…と思いつつ、ふと妙な思いが立ち上がってきました。

なんかこういうちょっとしたトラブルとか、偶然の出来事から、何か気づきを得たり、新たな展開を見つけたり…という逸話って時々耳にすることがあると思っています、ちょっと懂れていた部分がありました。やり手の人たちは、こういう日々の何気ない場面で発見や気づきを得たりするんだ！と自分もそういうエピソードが欲しくなって、何か閃くことはないかとしばしば思案しました。それで、一応それらしきことに思い至ったので、次の研究会はその筋でお話してみようと思っています。

今回の連載は、その研究会で話す内容の先出し版です。

検査をめぐる

タイトルが変わっていたのは「発達検査⇒検査」というところです。単純に考えるなら、この変化について吟味してみることになるでしょう。考えてみれば発達検査も「検査」の一種ですが、それほど日常的な、身近なものではありません。私たちが日々受けている検査と言えば、健康診断で受ける血液検査やX線検査、内視鏡検査…、最近ではコロナの抗原検査やPCR検査などの方が身近かもしれません。

そもそも「検査」を受ける意味や動機は何でしょうか。多くの場合は、検査を通して、一見しただけではわからない心身の状態について、客観的な数値や映像などで示してもらおうことです。そして、検査結果から、心身の状態を把握し、必要な対応を講じたいという思いがあることでしょう。発達検査も、一見して捉えることのできない、子どもの「発達」を、検査を通して発達年齢や発達指数という数値にして示そうとしている点は、他の検査と共通していると言えます。

「今さらだけど、発達検査も、検査の一種なんだよな…」と考えたところで、長年自分が

いつも微妙なひっかかりを感じていたことが、うまく言語化できる気がしました。

検査からわかること

これまで、発達検査の講習会に関わったり、発達検査に関する研修を引き受けてきたりしました。研修会の中では様々なご質問を受けることもあるのですが、その中で最も多いのが、「この検査結果からどういうことが言えるのか」というものです。とても一般的な質問ですし、特に批判的に思っているわけではないのですが、お答えしながらもいつも少しモヤッとしたものが残っていました。

特定の検査項目が達成できている場合に、それはどのような能力を有していることの裏付けになるのか、達成できていない場合にはどのようにすればその能力が獲得できるのか、どういう検査結果であれば自閉症の可能性を示唆するのか…など、この質問の背景にはさまざまな意図が含まれています。

以前、知人に「この質問に違和感があるのだけれど…」と話してみたことがあります。その時は「発達検査なんだから、その結果から発達について何か明らかにしたいと考えるのは自然なのでは？」と返され、そうか…と思いつつ、それでも何か釈然としないものが残っていました。

検査をすれば…？

検査をしたのだから、目的に応じた情報が得られるはず…というのは、一見理屈が合っているようにも思いましたが、よく考えると果たしてそうでしょうか。

例えばX線検査であれば、臨床検査技師が、X線撮影の機器を使って検査を実施し、その結果として病気の兆候（例えば肺炎など）を見つけることができるわけです。ですが、例えば臨床検査技師でもない私が、X線機器の使い方を教えてもらって検査を実施したとしたら、どうでしょうか。適切にスイッチを押せば機械は動くでしょうし、撮影すれば、何らかの画像を得ることはできるでしょう。しかしながら、人体の構造に詳しいわけでもないですから、「ここらへんは肺だよね…」というくらいしか判断ができませんし、写し出された白いもやのようなものが、何らかの病気をとらえたものなのか、特に異常はないのか、そもそも正しい方法で撮影できているのか、全てがあやふやです。とてもではないですが、病気の診断や、まして治療方針を決める材料になどできないでしょう。つまり当然のことではありますが、単に機器の操作方法がわかっているだけでよいということではなく、人体の構造についての専門的知識が必要になります。さらに調べたい部位に応じて、臓器や関節に対してどのような角度で撮影すればよいのか、衣服や装飾品を取り除くなど配慮すべき事項はないのか、など検査の実施に際して留意すべき点もたくさんあるでしょう。

先ほどの「発達検査をしたのだから、発達のことがわかるはず…」という考えや、「あまり発達に詳しくないので、発達検査を学ぶことを通して発達にも詳しくなりたい」というニーズについて、レントゲン検査に置き換えて考えてみましょう。「レントゲンを撮ったのだから、病気の有無がわかるはず」、「人体の構造にあまり詳しくないから、レントゲン検査を通して人体に詳しくなり

たい」と置き換えてみると、少し違和感の正体が明確になった気がします。前半の「レントゲンを撮ったのだから、病気の有無がわかるはず…」については、「そうとは限らないだろう」と思えますし、後半の「人体の構造にあまり詳しくないから、レントゲン検査を通して人体に詳しくなりたい」は、かなり奇妙なニーズです。

しかし、一般的な検査に置き換えればすぐに違和感の正体が明らかになるのに、「発達」になると見えづらくなるのはなぜなのでしょう。

人は関わり方次第？

少し話がズレるかもしれませんが、このことは「～ができない場合、何をしたらできるようになりますか？」という問いと通じる部分がある気がしました。

病気や疾病であれば、自然治癒を待つしかない、付き合っていくしかない、という判断があることも承知しているのに、「発達」や「スキルの獲得」については何かやり方がある、あるいは少なくとも「よい変化が期待できる方法がある」というイメージがあるように思います。人は関わり方次第、ということなのでしょう。

覚悟と責任

いつも“難しいな”と思うのは、自分自身が検査を実施した時には、検査所見に「○○に未熟さが見られる」とか「○○のような体験を重ねることが望ましい」のようなことは、書くこともあるからです。ですが、「じゃあ、同じような結果だったら、そのように書いてもいいんですね！」と言われたとしたら、そこはどうにも首肯しがたいものが

あります。その所見はあくまでも、自分が検査者として実施したプロセスをすべて加味して考えたことであり、特定の検査項目の成否や数値的な結果に当てはめて考えていることではないからです。

ここでふと、自分が現場で働き始めて数年目の頃のことを思い出しました。何か確固たるスキルや見識があるわけでもなく日々子どもや保護者と関わる日々は、自覚のない不安に満ちていました。よく言えば必死に学ぼうとして、悪く言えば何か「よいやり方」を見つけようとして、本を読んだり、先輩方の取り組みを取り入れたりして、子どもとの療育に臨んでいました。しかし、結果的にほとんどうまくいきませんでした。

その時に当時の上司に言われた言葉が、「覚悟」でした。

本を読んだり、人のやり方を取り入れたり、「何か良さそう」と考えて取り組んだことは、うまくいかなくても「意外と使えないな」と思うだけで、本当の意味での振り返りや吟味を行っていません。つまり、自分の決定に対する覚悟がなく、責任を負っていなかったわけです。

その後、すぐによい取り組みができるようになったわけでもありませんが、少なくとも現在では検査報告書に書いている内容には、これは少なくとも自分自身が検査場面を通して考えたことだ、と自覚的に思えることしか書いてはいません。その意味では、最低限の覚悟と責任は負うことができるようになったのかもしれませんが。

何かの本に書いてあったから、どこかの先生が言っていたから、ではなく、自分自身の言葉で語るところからが、スタートなのだと思います。